

信州大学の上條義一郎先生よりバトンを受け寄稿させていただきます。上條先生は、私が信州大学大学院に入学し、スポーツ医科学分野における研究を始めた時以来の先輩です。大学院では、能勢 博 教授のご指導の下、学位を取得しました。その後、Minnesota 州 Rochester 市、Mayo Clinic、Michael Joyner 教授の研究室に2年間留学し、現在は非常に幸運にも、助手のポジションで再びスポーツ医科学分野に戻り、研究に励んでおります。ここでは、「自由気ままに」という Afternoon tea のコンセプトにしたがって、留学中の出来事を3つ書かせていただきます。

1つ目は、私が Mayo Clinic へ留学した当初の英会話力を表す出来事です。Dr. Joyner が帰りがけに明日の予定について、わかり易く話してくれたのですが、私にはその英語が理解できずボカンとしていました。そこで、私が理解できるように彼はさらにゆっくり大きな声で話しましたが、私は「????」という反応です。そこで、彼がさらに声を大きくし、その声が研究室中に響きわたり、近くにいたポスドクが思わず Dr. Joyner に「Shizue は耳が聞こえないわけではない！」と指摘したほどでした。

2つ目に、Mayo Clinic の人に映った私の姿です。Mayo ではスタッフ、学生等すべて、名札をつけることが義務でした。しかし、私はその名札が大の苦手でした。なぜなら、そこには「Shizue Masuki, Ph.D.」とあるからです。ある時、エレベータに乗っていると、そこに患者さんとその家族が10人位同乗してきました。そして、彼らの視線は私の名札に注がれ、「Are you a Ph.D. ?」と質問されました。「Yes」と答えると非常に驚いた表情で「What a small doctor!」と言われ大騒ぎになってしまいました。エレベータが早く次の階で停まるのをどれほど待ち遠しく思ったことでしょうか。これ以外にも、名札を見て「What a young doctor!」または、「How old are you?」と言われた回数は留

学中数えられませんでした。

3つ目は、プレゼンテーションの質疑応答での出来事です。留学して数ヶ月が過ぎる頃、Program Project Grant (PPG) meeting (プロジェクト研究の検討会) で、これからの研究計画を私が発表する機会を作ってもらいました。これは Mayo Clinic 内の共同研究者同士の検討会なのですが、アドバイザーとして、外部機関からも運動時の循環調節で有名な Dr. Mitchell や、私の研究のメインテーマである Autonomic disorders の研究で有名な Dr. Robertson などが参加していました。私の発表内容は、「日本でおこなった一連の研究を起立性頻脈症候群の患者さんの運動時血圧調節メカニズムの解明に応用したい」というものでした。私の英語力といえば1つ目の出来事で示す通りなのでドキドキです。仲良しの Beth は「Shizue の発表のことが心配で昨夜はほとんど眠れなかった」と言っていました。さて、いよいよ私の出番です。アメリカ人にはエレベータでの出来事のように映る私が、チョコチョコと演台に進んで研究計画を発表しました。そして、なんとか発表自体は無事終わりました。ところが、その後の質疑応答で Dr. Robertson が私の仮説に対して「そんなこと起こりえないのでは?」と言ってきたのです。私はおぼつかない英語で、これまで日本の研究で得た実験事実と、これからの展開について必死で説明しました。PPG meeting が終わってから、その一部始終を聞いていた Dr. Joyner が私のところに興奮しながら近づいて来ました。彼曰く「Shizue は、剣道の竹刀を背中に隠し持っていて、Dr. Robertson が質問した時は、その竹刀で彼を返り討ちにするような迫力だった」とそのイメージを架空の竹刀をブンブン振りまわりしながら、私の前で何度も何度も実演してくれました。Dr. Joyner は宮本武蔵の大ファンなのです。

私に宮本武蔵の血は流れていないでしょう。しかし、間違いなく日本人の血は流れています。今



2005年7月2日 研究室の仲間との Summer party の  
1コマ。左奥から Dr. Joyner, Cheryl, 筆者, Diane,  
右奥から Beth, Brad.

後も、国際舞台に立ったとき、このことを忘れず  
海外の研究者と対等に勝負したい、と思っています。